玉置俊晃教授研究室　大学院医学研究科
井澤有紀

自由な雰囲気の中でいきいきと研究

■MD・PhD制度を利用してチャレンジ

新シリーズ第一回目に紹介するのは「医学部病態医学講座情報伝達薬理学分野」というなが～い名前が正式な肩書きという泌尿器科で臨床をした後、現在は腎臓薬理学、循環薬理学を専門に研究している玉置先生の研究室です。ここでは現在、エジプトやミャンマーなどから留学してきた方も研究に取り組んでおり、国際色豊かな研究室となっています。

さて、平成15年度から徳島大学大学院医学研究科にMD・PhD制度が導入されました。これは意欲のある学生が、早く高度な研究に参画する機会が得られるようにと、学部四年を終えた時点でいったん医学部を退学し、大学院に入学。博士号PhDの取得後、学部に再入学し、残り2年のカリキュラムを履修して医師国家試験受験資格を得るとともに学士の学位を取得するという制度です。医師国家試験に合格すれば医師MDとなりますので、MD・PhD制度と呼ばれています。

初年度である平成15年度には3名がこの制度を利用し見事に合格しました。その一人が玉置研究室の井澤有紀さんです。ある意味では勇気ある選択と大いなるチャレンジとなるこの制度ですが、井澤さんの選択理由は、「初めての制度なので、人と違うことをやってみたかった」といかにも現代っ子らしい返事。

せっかく入ったのにいったん退学するというこの制度への応募には、「ふつうのお医者さんになってほしい」と希望するご両親は最初は反対。しかし井澤さんは研究も大切とこの道を選び、「将来は医者も経験しながら、最後は研究の道に戻りたい」と考えています。もちろんご両親も今では理解してくれて応援してくれています。

■自由な雰囲気の中で充実した日々を

家庭教師のアルバイトをしたり、友だちと飲みに行くのが楽しみだったというごく普通の学生生活を送っていた井澤さんでしたが、2年生の時に受講した分子生物学の特別講義がおもしろく、自分の目指すものが見つかったと感じたそうです。

取材の時点では、薬理学に入ってまだ一週間。井澤さんが研究しているのは「細胞内シグナル伝達のMAPキナーゼの中のBMK1」について。専門外の方には何が何やらわからないでしょう?

まだ初心者の井澤さんが、「例として正解かどうかはわかりませんが」と前置きして説明してくださったことを、さらに無知な取材者の頭でまとめてみますと、「細胞に刺激を与えることによってどうなるかを調べることで、例えば動脈硬化など多くの病気を未然に防ぐことができる」というようなことらしいです。

「薬理は自由な雰囲気があり、先生方も優しくて、よく面倒を見てくださいます。とてもやりがいがあります。でもこんなに早く起きて、学校に長い時間いるのは今までなかったです」という井澤さんは今、すばらしい仲間に囲まれ、実験と英語の論文の読破に充実した日々を過ごしています。

井澤有紀[いざわ ゆき]さん

Yuki Izawa